埼玉大学教育学部の将来に向けて

埼玉大学教育学部長　堀田香織

今日の社会状況と教員養成

埼玉県では教員の年齢構成上、定年退職が続いたことから、教員需要が減少せず、むしろ教員不足が深刻な状況にありました。しかし、少子化が一層進行しいよいよ教員需要が減少に転じるターニングポイントを迎え、今後十年間で県内の小中学校教員採用募集人数が半減することが予想されています。

そうした中で国立大学教育学部もその在り方が問われています。地方では教員需要の大きな落ち込みから、四国の五国立大学が連携教職課程を、富山大学と金沢大学、宇都宮大学と群馬大学といった複数の大学が共同教職課程を開設しています。首都圏ではそこまでの教員需要の落ち込みはなく、新規採用する民間企業も多いので、教員就職率は地方に比べて低い傾向にあり、文部科学省からはこの教員就職率を上げるよう強く求められています。教員需要の減少予想、そして教員就職率の低迷という状況下で、埼玉大学教育学部は埼玉県の国立大学として、いかに質の高い教員を安定的に輩出していくかが課題となっています。

共生・ダイバーシティ社会の担い手づくり

今年度、国立大学は第四期中期目標期間の二年目ですが、埼玉大学は「地域人材・グローバル人材育成の教育基盤強化」、「研究力強化と社会的課題を解決するための共創拠点の形成」、「地域のダイバーシティ環境推進拠点機能」、「大学ガバナンス機能の強化」という四つの柱を設けています。そして目標達成に向けた取組の一つに「地域と連携する全学的な教員養成」を位置付けています。

さて、教育学部の第四期中期計画として「附属四校園は、教育学部・教育学研究科と連携・協働して、教育の実践並びに研究に取り組み、『共生・ダイバーシティ社会』の担い手づくりとなる教育モデルを開発・実践する。その成果を教育実践フォーラム等を通じて地域の教育界に還元することで、『共生・ダイバーシティ社会』の実現と学校教育の水準向上に貢献する」ことを掲げています。さらに六つの柱①「性」の多様性②障がい者・高齢者③異なる文化や言語④生命の多様性⑤多様な職業⑥貧困・経済的格差を立てています。

附属小学校では、六年生の社会科の授業「世界の未来と日本の役割～ジェンダー平等を目指す世界と、日本、附属小学校～」において、ジェンダー差別を改善するために国連やNGO、日本が協力して取り組んでいること、欧米諸国に比べ日本でジェンダーによる差別が根強く残っていることを理解し、自校の現状に目を向けることで、どうすべきかについて考えるという実践に取り組んでいます。附属中学校では、個に応じた指導とICTの最適な組み合わせを実現した教育実践モデルを発信するとともに、男女混合名簿を用いることや制服のリニューアルに向けた取組が始まりました。附属幼稚園では、多様な園児一人一人のよさや可能性を理解するとともに、「性の多様性」や「障がい者」をテーマとした保護者向け講演会などを通して、大人の意識変化へ働きかける取組を行っています。附属特別支援学校では、知的障がいのある児童生徒の社会参加に向けた教育実践を行い、さらに他の附属学校園との連携・交流により多様性の理解を推進しています。

教育学部の将来に向けて

今、持続可能かつ多様性と包摂の社会を実現してくことが求められています。多様な子供たちが協働して学級をつくっていくことの大切さを実感しながら学校時代を過ごしてこそ、いずれ成長してから多様な人を大切にする社会人になることができます。我々は、将来そうした社会の実現を担っていく子供たちを学校で育てていくことのできる教員を養成することを目指しています。そのために、埼玉大学教育学部においてもダイバーシティ環境を推進し、学生も教職員も異なる立場の人間への共感や、差別を敏感に感じ取り他人事にしない姿勢を高めることに努めてまいりたいと考えております。

今年度は埼玉大学創基百五十周年、つまりは教員養成を始めて百五十年の年になります。教育学部は受け継いできたバトンを次の世代に届けるべく努めてまいります。